

- 兼任講師 (1949年3月)
- 平成 三(1992)年四月 國學院大學文学部兼任講師
- 平成 六(1994)年四月 跡見学園女子大学文学部兼任教授 (1992年3月)
- 平成 十八(2006)年四月 跡見学園女子大学文学部教授 (1992年3月)
- 主要業績
- 共著
- 『必携万葉集要覧』(桜楓社 昭和五十一年刊)
- 『想像力と様式』(武蔵野書院 昭和五十四年刊)
- 『神の島の祭り イザイホー』(雄山閣 昭和五十四年刊)
- 『万葉びとの生活』(桜楓社 昭和五十五年刊)
- 『日本文芸史』第一巻・古代I(河出書房新社 昭和六十一年刊)
- 『万葉の東国』(笠間書院 平成二年刊)
- 『南西日本の歴史と民俗』(第一書房 平成二年刊)
- 『万葉の風土と歌人』(雄山閣 平成三年刊)
- 『久高島の祭りと伝承』(桜楓社 平成三年刊)
- 『自然と技術』(勉誠社 平成五年刊)
- 『9・10世紀の文学』(岩波書店 平成八年刊)
- 『高市黒人―注釈と研究』(新典社 平成八年刊)
- 『万葉の歌人と作品』第9巻(和泉書院 平成十五年刊)
- 学術論文
- 『古事記の成立をめぐる』國學院雑誌(第六十五卷第七号) 昭和三十九年七月刊
- 『大歌と大歌所』跡見学園短期大学紀要(第九集) 昭和四十七年三月刊
- 『稲舂けば―万葉集東歌の儀礼性』古代文学(第十七号) 昭和五十三年三月刊
- 『平安歌謡―掬い取られた歌謡と神事』国文学解釈と鑑賞(第四十六卷第三号) 昭和五十六年三月刊
- 『天之御柱を歩き廻り逢ひて』國學院高等学校紀要(第十九輯) 昭和五十九年三月刊
- 『神楽歌の表現』古代文学(第二十四号) 昭和六十年三月刊
- 『変遷祭―久高島の祭祀』古代文学(第二十九号) 平成二年三月刊
- 『新書論―折口信夫「稲むらの藤にて」をめぐって』折口博士記念古代研究所紀要(第六輯) 平成四年五月刊
- 『万葉集』卷十三試注』跡見学園国語科紀要(第四十一号) 平成五年四月刊
- 『跡見』の古代』跡見学園女子大学短期大学部紀要(第三十七集) 平成十三年三月刊
- 『あいさつ』の発生(1)~(4)』コミュニケーション文化(創刊号) 第4号) 平成十九年三月~平成二十二年三月刊
- 『仮面と憑依―土面・神話・祭祀』人文学フォーラム(第7号) 平成二十一年三月刊

高橋六二（たかはしろくじ）



生年月日（出生地）

昭和十五（一九四〇）年一月十五日（新潟県三島郡来迎寺村神谷）

学歴

昭和三十七（一九六二）年三月 國學院大學文学部文学科卒業

昭和四十二（一九六七）年三月 國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程修了

職歴

昭和四十二（一九六七）年四月 跡見学園高等学校教諭

昭和四十六（一九七一）年四月 跡見学園短期大学兼任講師

同 國學院大學文学部兼任講師

（昭和六十三年三月）

昭和四十八（一九七三）年四月 跡見学園短期大学専任講師

昭和五十二（一九七七）年四月 跡見学園短期大学助教授

昭和五十六（一九八一）年四月 大東文化大学文学部兼任講師

昭和五十七（一九八二）年四月 跡見学園短期大学教授

昭和六十一（一九八六）年四月 武蔵大学大学院人文科学研究科

兼任講師（昭和六十三年三月）

平成 元（一九八九）年四月 武蔵大学大学院人文科学研究科

兼任講師（昭和六十三年三月）

送ってくれたのである。ふるさとからのうれしいメッセージだと思っている。このうたは祝言（結婚式）など、祝いの席の始めに、謡曲の一節に遅れて女の人が歌い出すものである。

へ万歳の祝い 重ねておあがる ごしゅは 命ながいは菊の酒

へ改めて 一つさします この盃を ごしよはたくさん 快く

いわば古代からある讃酒・勸酒歌の一種なのだが、他に例がなく、うたい方の特異性がかねて気がかりだったのである。不明はなお考え続けるとして、私の人生を支えてくださった跡見学園と、教職員・学生・生徒、そして卒業生とすでに御退職の皆さんに、感謝の心をこめてこの「万歳の祝い」を贈りたい。ごきげんよう。

四月一日付でいただいた辞令を今改めてみると、「跡見学園小学校昭和四十年年度定時講師として国語科の教授を委嘱いたします」という文面で、発令者も「学校法人跡見学園理事長／跡見学園中学校校長 飯野 保」となっている。校名・職名がこのように用いられていたことをまったく忘れてしまっていた。担当科目は高校三年生の古典であった。「こきげんよう」という挨拶にめんくらしい、教卓の上に花が飾られ、おしほりまで置いてあるのには驚いた。高校・大学とも男子系の中で過ごしてきたから、女子ばかりの、しかも七歳くらいしか違わない生徒の顔を見ながら話すのがなかなかできなかった。

昭和四十二年、大学院の修了とともに専任職にしていた。こうも順調に進んだのは、昭和四十年に跡見学園女子大学が開学して教員の移籍があったからではないかと、あとになって推測してもみた。ともかくさまざまに努めたつもりである。生徒たちにも日々多くのことを教わった。昼休みにフォークダンスをともにするようになった。その生徒たちも今は還暦前後になったはずだが、臉に浮かぶのは十代後半の姿ばかりである。

短期大学に移って、研究も自由に進められるようになった。いちばん勝手気ままに過ごした時といってよいかもしれない。なによりも学生たちが自主的に動くことがうれしかった。たとえば民俗研究部の顧問をするようになって各地を採訪してまわったときのこと、現地との交渉、日々の差配、成果の発表等、実にてきばきとこなしてしまうことに感嘆した。社会人として巣立っていく姿に期待は大きかった。

平成と年号が変わってからは次第にきつくなった。私にできたことはきわめて微々たるものでしかない。ともあれ学園規模の方策として、短期大学は大学に設置する二つの新学科に期待をこめて歩みを改めた。私はコミュニケーション文化学科の所属となった。コミュニケーション文化とはなにか、跡見のこの学科はどうすればよいのか、と問い続けたまま四年の任期が終わる。今や行く末を厚く託すのみである。

旧臘、ふるさとから「マツツアカ（松坂）」の録音テープが届いた。従姉の吹き込んだものを小学校の同級生が



## 定年退職なさる先生からのメッセージ

### 万歳の祝い

高橋六一

私のふるさととは越後平野の西南端、ちょうど信濃川がゆるやかな流れに変わり始める左岸に近くある。南はるか遠くに苗場山を望むことができる。まだ白く包まれたその山並みが霞み、風にほのかなぬくもりをおぼえるようになる、やがて春だった。あの山の向こうにはどんな世界があるのか、信濃川を遡って尋ねてみようか、というのが子どもの頃の夢だった。ある夏、隣のむらを通り抜けた先にある畑で手伝いをしていた。仕事にあきあきしていた耳に川向こうに行く電気機関車の警笛が聞こえてきた。列車の姿は見えないが、桐の林をぬって聞こえてきたのは柔らかな音色だった。あの上越線の行き着く東京とはどんなところなのか、これもまた子どもに湧いた好奇心のひとつだった。

昭和三十三年、結局、上京してしまった。東京に来たからには本物を知りたい、観たい、聴きたいという思いで学生生活を送った。昭和四十年、残る二年の大学院生活を支えるために非常勤講師の口を探して大学の就職課を訪ねたら、ちょうど跡見学園からの求人があると紹介された。跡見学園との縁はこのように、偶然と言ってもよいような形で始まった。